古代文字資料館発行『KOTONOHA』第 211 号（2020 年 6 月）

拾骨

舞鶴著
榊原真理子訳

1

何年ものひどい妄想性障害の後、ぼくはベッドの上でほとんど不随だった。起きて歩くときも猫背、足の裏は床にへばりついて踵(かかと)が持ち上がらなかった。妻は抗不安薬を飲んでいるせいだと言ったが、昼も夜もベッドで伸びていて、必要なときにも人前に出られず、踵が上がらないなんてものじゃなかった。

ベッドで空想するよりも役に立つ本を読むほうがいい。妻が古本の露店で世界地理の雑誌をどさっと買ってきてくれた。その中には旅行家の雑誌が何冊かあった。昔の恋敵で今は妻の親友の小鹿(シアオルー)は、精神の導師・奥子(アオズ)のスピリチュアル系のシリーズ本を一揃い運び込んできた。昼も夜も、ぼくは精神の旅行家・奥子(アオズ)と世界旅行から宇宙へとまっしぐらだった。幸い、奥子(アオズ)はぼくと同じ習慣があった——奥子(アオズ)はニンニクを好んで食べるが、ニンニクは彼の抗不安薬なのだ。

2

ある夕暮れ時、ぼくはみんなで棺の蓋を閉める前の母さんを取り囲んで、うつむいて最後の別れにじっと見つめているという夢を見た。ぼくは二、三の肩の合間から見ていた。母さんの顔はどんぶり大の牡丹の花みたいに、眉尻から耳たぶまでのあたりが赤くなって頬紅が差していた。

弥陀(ミートゥオ)寺が頼んだ黄色い法衣の僧侶が懺悔の経文をぶつぶつやっている間、誰かが唇を噛みしめて鼻に突き上げてきた嗚咽の声をもらしたり、棺店の大工が雑談したりしていた。いきなり「ミャオウ」と声がして、そこにいた人たちが一斉に振り返ってきょろきょろした。——そのとき二、三の口や鼻の間からちらりと見えた。母さんが目を開け、左目で、ぼくに向かって目配せしたのを。

振り返るまでもなく、裏庭の鳥籠に入れておいた黒猫が飛び出して来たことはわかっていた。黒猫は母さん宝物だ。今、この猫に何かあったらまずい。みんながこの猫をとっ捕まえて殺す前に、ぼくは猫を抱き上げ足早にそこを離れた。足がドアを出るときにぼくは振り返って見た。母さんが口元を緩めてうっすら微笑んでいたのを。たくさんの僧侶と俗人の胴体の合間から。

3

ぼくは口元を緩めて微笑みながら目を覚ました。夕日が向かいのビルのガラスにかかり、余った光が裏庭の塀の縁にある刺竹(しちく)の藪に流れ落ちて分かれるのが見えた。死んで十九年になる母さんがまた夢に出てきた。

母さんが死んで三年目の春、母さんが初めて夢に出てきた。夢の中で、実家の長いこと使われていないドアをこじ開けると、母さんが客間の籐の椅子に折り目正しく坐って、白いスリップだけ着て体全体にぼうっとした光をまとっていた。「母さん、」とぼくは駆け寄ってその膝にすがり、下腹に顔をぐりぐりと押し付けた。「——なんでこんなにずっと帰って来なかったの」。あの人はただ微笑むと、少ししてから静かに言った。「あるご夫婦と知り合って、一緒に連れ立って旅をしててね、もう十七日目。ここを通りかかったから寄ってみたんだけど、すぐに行かないと……」

ぼくは口元を緩めて微笑んだまま夜の青黒い家に入って行った。夕食のとき、妻がぼくの口元を何度かチェックしていたが、たまりかねて聞いてきた。「もしかして虱目魚[1]の骨が刺さったの？」

4

母さんが死んだのは四十五歳で、ぼくは十九歳だった。今、ぼくは四十一歳だが、母さんの歳はもう数えなくてもいい。奥子が言うには、母さんはもはや無限、ある種の「無時間性」という属性に入って行ったのだった。

十九歳の年の中秋の深夜、ぼくは汽車の車輛と車輛の間の通路で不随になって、飛び去ってゆく暗鬱な広野を見ながら泣き叫んでいた。その後、家で父が母さんの顔の白い布をめくった。——夕方に死んだのだ。その顔には生と死の間でもがいた苦々しさが残っていた。そう、苦々しさ。人をむかつかせる苦味。その後毎晩寝るときになると、瞼にその顔が浮かんだ。

母さんは夢に出て来るまで、早春の朝のように静かにぼうっとした光を放っていた。その後十年が過ぎ、母さんは遠い遠いところへ旅に出た。

その間、何度か夢を見た。夢でぼくは手に鎌をつかんで墓の囲いを跨いでいた。秋の陽射しの中、山の斜面は墓の周りに生えた人の背丈ほどの草でいっぱいだった。鎌を上げ下ろしすると、長い間日光に当たっていなかった墓の土がニッケイを煮込んだか何かのような匂いをさせていた。突然ぼくは夢で足元を踏み抜き、墓の囲いがへこむと同時に一匹の青い蛇がぬっと出てきた——

こんな夢と夢の間、毎年中秋節の頃になると、墓地の前の小道に立って広大で鬱蒼としたジャングルと向き合った。重苦しい現実の人生から、自ら足を踏み入れずにはいられない夢現の世界へ——あの青い蛇が奥で待っている。

5

口元を緩めて微笑んでいる母さんがまた夢に出てきたのは、その一週間後だった。その夜寝る前、妻がいつものようにベッドに入って雑談をした。子供の頃、彼女の家の竹垣のところに柳の木があって、ちょくちょく猫の死体をぶらさげに来る人がいた。夜が明けてまだ間もない朝だ。猫は夜に遠い外れの方へ行って死ぬものらしい。その時分はビニール

[1] 訳注：ミルクフィッシュ。東南アジアの白い食用魚で、ニシンやイワシに近い。台湾語でサバヒー（Sat-bak-hi）。

袋がなかったからいつも風呂敷でくるまれていたのだが、不思議なことにあんな細い柳も猫をぶらさげるのに耐え、陽光の中黄昏まで風に揺られていた。

「柳の枝でブランコをするために、」ぼくは言った。「猫は死んでみたっていい。」

その後ほどなくして、ぼくはすねのところを猫の背が撫でていったのを感じ、同時に母さんがうっすら目を開けるのを眺めた。ぼくは微笑んで母さんに向って目配せし、黒猫を拾い上げて出口の方に行った。あの人は体を起こしていた。泣き叫ぶ人もいて、七、八本の手が伸びて取り囲み押さえつけようとした——。黒猫とぼくは部屋を出るときちらりと見た。母さんは体をまっすぐ起こしていた。何人かがぽかんとあっけにとられた顔をしていたが、声は立てなかった。「なんで起き上がらせてくんないのよ、」裏庭の百年前から枯れている井戸から浮かび上がってきたような声だった。

6

豚足煮込み湯麺(タン)。ぼくの普段の昼食だ。奥子(アオズ)が言うには、普段食べてきた麺をひたすら一本につなげてたどってゆけば心の天国へたどり着ける。ぼくは籐の椅子にもたれて、午後一時半から二時四十五分までの間日向ぼっこをする。これより前と後は、周りのビルに陽の光を遮られてしまう。陽の光は決して刺竹の隣の枯れ井戸には届かない。母さんの声が井戸垣にある厚い苔みたいにじっとりしていたわけだ。

五時を三分過ぎると、妻が左手のキッチンをうろうろし、ぼくの視界に入ってくる。今日はかっかして赤くなったお盆のような顔だ。小学生が彼女をかんかんにさせている、今日。春になってから、男子が女子のスカートめくりをするのが流行っている。ずっと我慢していた女子が今日の昼になって、昼寝の時間の隙におもむろに体の大きな男子のズボンのファスナーを下ろした。「もう腹が立つ、」妻はパープルのストッキングを履いた足で地団太を踏んだ。「あのおケツ小僧、パンツを履いてなかったのよ——」

「おケツ小僧を許してやれよ、」ぼくは妻をなだめた。ぼくはついさっき名前も知らない場所を旅したところだった。軽業のカンフーができる大きな鳥が尻を突き出し、母鳥の突き出した尻のてっぺんにある茶碗の上に立っていたのを、この目で見た。ぼくは、暇なときうちの裏庭の刺竹の先っぽに立ってみてくれないか、とその鳥を招待した。「そのときは、おたくのおケツ小僧たち皆さん見に来てもらってもいいですよ」。

その夜、墓の土が四方に飛び散り、母さんがむくっと起き上がった。うつむき加減で陽の高い大通りを歩き、静かな顔は無表情で、黒からほとんど無色になった色の死装束を着ていた。ぼくの六、七歩後ろを歩き、ぼくが赤信号で止まるとあの人も止まった。路地の一番奥の表具工房に入ると、工房の主人が右手は硯を研いだまま、左手でぼくに書軸を手渡した——あの人も手を伸ばして、受け取った。硯からは青春(チンチュン)社の防腐剤の匂いがした。新しく店開きした花屋を探して行くと、小鹿(シアオルー)が忙しく花を生けていた。「開店おめでとう、」ぼくは大声で言った。「書をプレゼントするよ、」小鹿(シアオルー)はぼくの手から書軸を受け取って、開いた。死生一如酔酒花痴[2]。小鹿(シアオルー)があっけにとられたので、ぼくは口ごもって言った。「い

[2] 訳注：生き死には酒と色狂いのよう。

まいちならもう一つプレゼントしようか、」小鹿(シアオルー)は、花団錦簇花好月円[3]、と書くよう指定してきた。天後宮を過ぎ、夕闇の色が黒い石の通りに浮かび、武廟口を出た。マクドナルドかケンタッキーのガラス張りの店の前に立って、黙ってぼくが飲み食いするのをじっと見ていた。ぼくは歩を速めて少し止まり歩を速めた。あの人も歩を速めて少し止まり歩を速めた。店々の夜の灯りがあの人の体にかかったけれどやはり無色の黒だった。ぼくは駆け出し、さっと家の中に入り、部屋まで入って、ドアに鍵をかけた。ベッドに倒れ込むと同時にドアをノックする音が聞こえた。コンコンコンまたコン……

7

ゴキブリに股間を齧られたときのように、また四本足の蛇が荒野で交尾するときの叫び声ように。ぼくは跳び起きてドアの鍵を開けた。夜の帳(とばり)の中、皮を剝いたザボン[4]のように白い妻の顔。

「鍵をかけてる精神状態が災いしてるのよ、」妻はぼくが泥棒を警戒するかのように妻を警戒していることをなじったが、ベッドで雑談をした後はもう戻って来なかった。「あの悲鳴ったら、」二日後の夕食のとき、妻がまたありありと話した。あのときドアの外を生きてる豚足が通り過ぎていったみたいだったけど、怯えるあまりすぐ豚足の煮凝りになっちゃったのね。

ぼくはぽつりと言った。昨夜は水路を過ぎて谷を過ぎて川を過ぎてほとんど河口まで行ったんだけど、振り返ったら家の方角がわからなくなって、それで叫んだんだ——。奥子(アオズ)が言うには、人生は豚や犬にもとる、豚や犬は本能的に叫べるが、文明人にはできない。叫ぶだけでやらないのは男じゃない、と小鹿(シアオルー)は言う。ぼくは妻にもう部屋に鍵はかけない、必要なら雑談の後も母屋に戻らなくていいと請け合った。

幾晩か続けて、ぼくは背中をこわばらせながら母さんが家の奥の部屋へと入って来るのを待ち、遠くの玄関のノックの音を聞こうと気張った。——本当にもう何年も母さんのことを忘れていた、というのもあの「静かな旅人のイメージ」がぼくを安心させていた。母さんは終わりのない旅の途上にいる。周りはぼうっと光る草花、突然割りこんでくる汽車や車はない。

とすると、安心しているということは、それはもうぼくの妄想ではない。母さんはむっくりと起き上がり、ぼくに向かって目配せし、口元を緩めて微笑んだ、——はるばる千里の彼方からあの人がぼくを探して戻って来たのは何のためだろう？　ある晩、人影がさっと入って来て、ぼくのところに飛び込んで来た。そわそわして手足を震わせた妻だった。また前史の恐竜だ。洪水を避けるために、うっかり彼女の脚の間に入りこむ……

---

[3] 訳注：美麗で円満。
[4] 訳注：ミカン科の果物。

8

ぼくは水仙(シュイシエン)後宮まで息せき切って自転車をこいで、六舅(リウジウ)[5]一家が祀っている太子爺(タイズイエ)[6]を訪ねた。六舅(リウジウ)は半生、花園(ホアユアン)町でチンピラたちの親玉をやっていたが、歳をとってからは腰を下ろして家の中から睨みをきかせていた。

「うちの姉さんのことだが、」大舅(ダージウ)[7]が豹革のジャケットと中に着ていた二つの S 字の形をしたベストを一緒にさっと脱いだ。「この老いぼれがすぐ太子爺(タイズイエ)に会いに行くよ、」軒下まで出て行って、干してあった一枚の大きな赤い頭巾を取って腰に巻くと布も三段腹の形になった。戻って来ると両手をテーブルにつき、踵を浮かせた。

その震え、膝の骨から来たのかつま先から来たのか、その震えが、腹の贅肉、みぞおち、頬へと広がり、頭もぐらぐらして V 字になって倒れ込んだ。「苦しい！　苦しい！」水宮の鰐の喉の奥から来たらしいうめき声、あの震えがこの苦しそうな音の基調に装飾音をいっぱい付け足し、最後には長く連なった変調になった。百日咳の老人の喉の扁桃腺みたいな。六舅(リウジウ)は急に跳ね起きようと、両手で力いっぱい「バン」と床を打つと同時に、両膝を床について上半身でテーブルに突っ伏した。「六舅(リウジウ)、六舅(リウジウ)、」ぼくは慌てて呼びかけた。

「苦しいなあお前の母さん、」と憑依[8]から戻って我に返った六舅(リウジウ)が言った。六舅(リウジウ)は今あの世に隠れたところだ。母さんが会いに来たが頭も顔も泥水でいっぱいだった。「泥泥泥だあお前の母さん。」ぼくは太子爺(タイズイエ)にどう思うか聞いてみた。

生憎、太子爺(タイズイエ)は麒麟豹(チーリンバオ)[9]で見回りに出ていた。六舅(リウジウ)は豹革のジャケットを羽織った。太子爺(タイズイエ)がいたとしても、こんなつまらないことには構わないだろう。「おまえはたくさん勉強したとはいえ、」六舅(リウジウ)はチンピラの目つきでしきりにぼくを眺め回した。「おまえの母さんの立場で考えるんだ、――どうすれば日の目を見ることができるんだ？」

9

ぼくは民間史実の本を探して、夢判断篇を繰った。墓地に行く夢はかえってこの世でのことがうまくゆき、棺を見るのは黄金が地面から出てくるのを見るようなもの。それならば、墓地にある人体を見る夢は長患いや嫌な気を全て消し去る。枯れ枝がうららかな陽射しに長く当たれば嫌でも元気づくように。じっとりした妄想の暗い影ならなおのこと。

その晩、ぼくは二哥(アルガー)[10]が賃貸で住んでいるところの客間に座って、一先ず付き合って台湾 XO――米醸造酒の維士比(ウィスビ)[11]を何杯か飲んだ。ぼくが座っている場所からは近くの空港で点滅する誘導灯が見えた。防災センターの塔が壁の上にしゃがんでいて、塔の下には百年以

---

[5] 訳注：母方の六番目のおじ。

[6] 訳注：道教や台湾民間信仰で崇められている伝説上の人物・哪吒(なた)の尊称、または、仏法を守る武神。三太子、太子元帥など他にいくつもの呼称がある。

[7] 訳注：母方の一番上のおじ。

[8] 訳注：童乩(タンキー)（台湾語 tang-ki）と呼ばれる福建、潮州、台湾のシャーマン、霊媒師の状態。タンキーは憑依体質の者で、神の意志を人間に伝える役割を果たす。

[9] 訳注：自転車の商標。

[10] 訳注：二番目の兄。

[11] 訳注：台湾の薬用酒。XO（Extra Old）は最高級を表す。

上経っている墓場が広がっていた。

もしひどい鼻詰まりで、そしてたまたま気分が優れず口をしっかり閉じていたなら、飛行機が頭上を通り過ぎるとき、間違いなく目玉が飛び出て来るだろう。工場のオーナーである二哥(アルガー)はそういうふうで目が出ているから、毎日「頭とタマがぶつかるほど体を縮める」小さな家庭工場に無理矢理十二時間籠れるようになった。日夜せっせと便器のつまりを直すゴム製の給水カップを作り、毎晩帰宅して風呂を済ませると九時十分になる。二哥(アルガー)は日々たまった股間の熱を冷ますためにXO台湾を数本飲まなければならなかった。そこそこ慰めになるのは、飛行機と飛行機の隙間にある彼の眼前が、生きている人間が夢見るが手に入らない静土ということだった。

「拾骨をしないか。」

ぼくは飽きもせずしゃべり続けた。母さんがどうやってむっくりと立ち上がったか、太子爺(タイズイェ)と豹親分はどう言っているか、旧暦夢占いの大家がどう言っているか、母さんがどうやって道から道へとぼくを尾行し、ぼくがケンタッキーを齧るのを見ていたか……「とっくにおまえたちに言ったが、」二哥(アルガー)はぼくの話を遮った。「拾骨はしなきゃならん。」ケンタッキーのチキンはどう齧ろうが、子供の頃うちの裏庭で育てていた地鶏とは比べものにならない。

何年か前、二哥(アルガー)の妻の実家がやっていたチェーン経営の工場が共倒れになって倒産した。二哥(アルガー)の義母の霊が、すぐに先祖の骨を拾えば不良債権の取り立て屋が殺しに来るのが止む、と義父を説得した。そのとき、二哥(アルガー)には自分の兄弟のことが危ぶまれた。「母さんの骨を拾ってくれないか。」大哥(ダーガー)[12]は何も言わなかった。何事も実際的でないから、彼には実際的な意見がなかった。その頃、ぼくはちょうど儒家を経て陰陽雑家になっていたが、やはり儒家の「あの世に行けば安楽」という正統思想が優勢だった。もちろんその頃、陰陽雑技のためにまだ家に戻っていなかったこともあって、あの世に行った母さんの住まいは実地に行って実際に考えることができなかった。「安楽になったのなら、」ぼくはすっぱり話をまとめた、「そこまで母さんのことで苦に思わなくても。」

10

二哥(アルガー)はぼくに母さんの最後のことをしっかりやってほしいと言って、ぼくが深夜静土の町外れを歩くのに付き合ってくれた。ココナツ屋台の灯りが見えるところまで。静土を通るとき、確かに感じざるを得なかった。あの連なってゆく静土の稜線はあんなに大きく起伏し定まらないと。ぼくは、二哥(アルガー)が長年作ってきた給水カップをつなげれば、地球の真ん中を通って、便器に座った何人かのパリジェンヌの尻をきっと吸い付けることができるだろうと心底思った。

慎重を期すため、ぼくは日数限定追跡付きの郵便を台北のコンピュータ企業で忙しくしている大哥(ダーガー)に出した。一晩おいて電話があり、ただ「要はいくらかかるかだ、やるからには効率よくないと、経済効果を合わせないとな」とだけ言った。電話の向こうの騒音は明

[12] 訳注：一番上の兄。

らかに豪華な飲食店だった。

ぼくの鉄馬(ティエマー)[13]は再びすぐに太子爺(タイズイエ)に会いに行った。奥子(アオズ)が言うには、その爺(イエ)は元々両親から生まれていない、さもなければ年端もいかないときどうやって肉を削ぎ骨を切り分け父母に育ての恩を返すなんてことがわかるんだ、ということだった。だが小鹿(シアオルー)は、あらゆる爺(イエ)のうち、この「血が沸騰しはらわたが煮えくり返るほど憎たらしくて可愛い」爺(イエ)だけが好きだと言った。爺(イエ)の前には千年ダイヤの灯りが二つ光っていた。北極殿から来た嫁が、目移りしやすい若い夫を捕まえておくのに力を貸してほしいと爺(イエ)に頼んでいた。

暫時この世に戻っている六舅(リウジウ)が「安阿楽(アンアーラー)に会いに行け、」と言った。左手は揺れる贅肉を押さえていた。「安阿楽(アンアーラー)は――昔誓いを立てた兄弟は今南門(ナンメン)路の端で総監をやっている、」右手はそのまま外に押し出そうとぼくの肩をつかんでいた。一晩中、ぼくはあの嫁の果てしなく悲しげな腰回りを思い出していた。妻がやって来てこの何日か夜どこへ出かけていたのか聞いた。ぼくは手近なヨーロッパ一人旅のガイドブックを伏せて顔に乗せた。「ここのところはね――この辺の一人旅ガイドブックを書いて小学生に見せる計画があるんだ。」

11

ぼくは殯儀館総務室の外に張り付いてひとしきり悲しいだの楽しいだの大声でわめいて、それを長いこと三、四回もやってから、やっと総監が館内のどこにでもいる、つまり総監室にはいないことに気付いた。ぼくは館内をうろうろした。職員らしき人に「総監閣下安阿(アンアー)楽(ラー)を見かけましたか」と聞くと毎回、今見かけたところだと言われた。ぼくという足の速い馬が彼のところに着くと、彼はいつでもそこを離れたところだった。

瞼の半分を覆うまでに長くなった眉毛の初老の男が、冷凍室の通路に立って腕を振り回して空気を入れ替えていて、ぼくが聞くのを待たずに言った。「総監殿はさっき走って行ったよ、」そしてまた言った。「古株のわしに聞くまでもなくあんたが総監を探して冷凍室を開けることは知ってたよ。」というのは、みんな総監閣下を追って冷凍室をチェックするし、みんな総監の手中には常に少なくとも冷凍室が一室あることを知っているのだ。そしてみんな一年春夏秋冬どの冷凍室も自分のところは満室だとアピールしていることを知っている。

このモッサ眉毛は、開館以来の首席メイクアップアーティストだと自己紹介した。いつの日かぼくの慈悲深い顔つきも彼に化粧してもらう必要があることに免じ、彼は総監殿の秘密をこっそり教えてやろうと言った。総監閣下のあらゆるプライベートにおける秘事はどれも、安楽三姨太(アンラーサンイータイ)[14]の美しい手を経なければならないという。「ほれ、」首席はぼくをつれて冷凍室の後ろの壁に回ると、遠い鉄柵の外にある吹き抜けの中の一室を眺めた。「ほら、三太(サンタイ)が九号の太筆で処女眉毛を描いている。」

ぼくはすぐに総館の正門まで行き長い柵の塀を回り込み真後ろの処女三太(サンタイ)の前に行った。「近道したいなら、」首席はすかさず指差した。「安阿楽(アンアーラー)を見習って――三太(サンタイ)の胸の前を通

---

[13] 訳注：自転車の商標。

[14] 訳注：安楽(アンラー)（安阿楽(アンアーラー)）の三番目の愛人。縮めて三太(サンタイ)となる。

って行くことだ。」ぼくは足の向くまま柵のところまで行き、手のするまま二本の鉄柵を引き抜いた——果たして確かに総監は何本かの長いポリウレタンのチューブをメリメリメリ引き裂いて人形を作っていて、人形安阿楽(アンアーラー)はこのように速やかに三太(サンタイ)の胸の前に差し出されたのだった。

ぼくは後に何度か行ってやっとよく見えた。三太(サンタイ)が坐っている椅子の後ろには福棺[15]が三つ積んであった。右側のガラスの大きな棚にはが大理石の壺が七、八個置いてあり、左側には記録用の大きな黒板が掛かっていてこっちにもあっちにも字がびっしり書いてあった。あなたはそのときそこに目をやることしかできない。ウェストをぴっちり絞った真っ赤なロングワンピースを着てくっきりと形が浮き出たあのたわわな乳房に。立ち上がって出迎えてくれたとき、その乳房はまるで天を支えるかのようだった。「お弔いの風水の吉日を見る——のでございますか？」

12

拾骨は一回九千だ。拾骨師は市内でも有名な土公仔獅(トゥゴンザイシー)の血筋の職人で、手作業は丁寧だが費用が高く、彼のタイムスケジュールにも合わせなければならなかった。三太(サンタイ)のBBCALL[16]で、特約している風水師が来ていた。その場で赤い紙に故人の姓名と生年月日を書き、土を掘るのに縁起の良いのはいつかを占った。三月二十九日の朝九時から十時だった。

三太(サンタイ)は黒板右下にびっしり書かれている字を指差した。四月十五日より前は拾骨師は空きがなかった。風水師はすぐに厚い暦の本でまた四月十五日、五月二十四日という二つの縁起の良い日時を探し出した。ぼくは決められず迷った。四月は春で、五月も春だ。「四月十五日でいいわ、」と三太(サンタイ)がナイフの背で肉を切るかのような気だるい声で言った。「五月は蒸し暑くてお墓の草もぼうぼうでしょう。」

BBCALLが鳴り、風水師が電話をかけながら横目で見て言った。「楽仔嫂(ラーザイサオ)[17]の今日の風水はちょっと歪んでるよ！」安阿楽仔嫂(アンアーラーザイサオ)はくすくすと笑った。「あのねえ、」美しい指を出して風水の団子鼻を触りつつ、甘ったるく聞いた。「金の壺はご入り用ですかしら。」風水がぼくの代わりに応えた。「金の水壺にしよう、この細工はすごい。」

二つのたわわな乳房が弾んだ。幸い風水師はその少し前に車をつかまえて立ち去っていた。乳房の谷間が落ち着いてから、三太(サンタイ)が言った。「この悲しくて辛いお商売はにっこり笑って馬鹿なふりをしませんと。」ぼくは顔を整えて答えた。「慣れることですよ——普段はぼくも同じです。」

三太(サンタイ)はガラスの戸棚を開けて、壺を見せてくれた。黒と白の花紋様のものは後山の花蓮(ホアリエン)大理石で、一つ二千から三千。みかん色、水蜜桃色、青りんごの紋のものは東南アジアから輸入したもので、時価一つ七、八千。ほかに喜馬阿(シーマーアー)山純雪石で作ったものは飛行機での取

---

15 訳注：表面に「福」という縁起の良い字の書かれた棺。

16 訳注：ポケットベル呼び出し。

17 訳注：楽(ラー)（安阿楽(アンアーラー)、または安阿楽仔(アンアーラーザイ)）の夫人。三太(サンタイ)のこと。

り寄せで一つ十万、――密輸品でも三、四万は下らない。

ぼくは水蜜桃のものを手に取って、右手で持ち、左手で二、三回なでた。「そうじゃない、」三太(サンタイ)が直した。「人の手じゃ質感の良し悪しは触ってもわからないのよ、」三太(サンタイ)は顔を水蜜桃の皮にくっつけると、くっつけたまま、数秒、離し、またくっつけ、数秒――を七、八回続けた。ぼくはそれに倣って桃の皮を手にして瞼にくっつけた。ある種尾骨を涼しくするような湿った香り、パウダーファンデーションはアメリカのアダム、チークは日本の西施を使っている。

順番に七、八個の壺の表面一面に肌を貼り付けた。水蜜桃の香りはもう言わなくてもいいだろう。みかんの壺は深い秋の夕方のみかん園にいる感覚にさせた。青りんごは昔「緑野遊踪」[18]したときどこにでも青りんごがあったことを思い起こさせた。花蓮石は花蓮薯(ホアリエンシュー)[19]の匂いをかいだようだった。石の採掘作業員の弁当はみんな花蓮薯(ホアリエンシュー)だとか。母さんが一生で一番多く食べたものがサツマイモだった――切り干しサツマイモの炊き込みご飯[20]からサツマイモ混ぜご飯[21]まで。みかんは体を冷やすから母さんはあまり好きじゃなかった。りんごは病人が食べるものだ――病気のとき母さんが食べるりんごはあるだろうか。水蜜桃はその頃珍しいもので母さんは食べられなかった。ぼくは思った。この水蜜桃にしよう。母さんに旬のやつを食べさせてあげよう。もちろんアメリカのアダムと日本の西施も付け足して。

桃の壺にすると口を開きかけたとき、「あらまあ、」と三太(サンタイ)が興奮して胸を波打たせつつ甘ったるい声で言った。「黒心石！　あらまあ南アフリカから輸入した黒心石もあったわ。石の表面は少女の肌と比べられるほどすべすべですけど私のお肌も負けていないの。先週民権(ミンチュアン)路の呉社長がお母様用に一つ買ってくれたのよ。」

黒心石！　ぼくが手を放すと桃の壺はうまいこと三太(サンタイ)の胸の谷間で受け止められた。黒心石！　世の中に「黒心」などと自称するような石があるとは。黒心は正札価格で一つ二万四千。「秋哥舅(チウガージウ)の紹介ということなら、」黒心石は一つ一万八千。ぼくは振り返って理想の黒心石を探した。

「――今、島内には在庫がないけど、私がねどうにか一つ持ってきて差し上げられますわ。」

「黒心？」ぼくは用心深く尋ねた。「どういう字の――黒心？」

「あらやだ黒心肝(はらぐろい)の黒心ですよ、」ナイフの背が四十五度傾いて胸の肉を切り分けた。三太(サンタイ)はヒャッヒッヒッと笑った。

---

18 訳注：緑の野原をめぐり歩く。
19 訳注：サツマイモの甘い加工食品。
20 訳注：原文は「蕃薯簽飯」。生活が貧困の際の主食で、米の割合が少ない。
21 訳注：原文は「蕃薯摻飯」。大きく乱切りにしたサツマイモと一緒に炊いた米。生活に余裕がある際の主食。

13

朝、刺竹のところで鳥がさえずる頃目が覚めるが、ベッドの中でぐずぐずしている。午後に陽の光が裏庭の土に差し、その暖かさがベッドにまで広がる。春は籐の椅子の上で動けなくなり、豚足麺をのんびりともぐもぐやる。昔の人が旅行雑記で言っている。春になる三月、花はまだつぼみ、春の草はもう育ち、草は血迷う。家で豚足麺をもぐもぐやっている方がましだ。妻が昨晩、いろんな色の包装紙を持って来てガラス窓に貼った。隣家は春の草みたいに塀の上から覗くべきじゃないとか言って。でも、ぼくは塀の上の春の草が好きだ。詩人・奥子（アオズ）が言っていたことだったか。臨終の目だけが春の草の塀をじっくり見るということを理解できるのだと。母さんは聖母マリアが開いた病院で死んだ。二階の病床から見渡していたのは遠く果てまで連なるサツマイモ畑だ——臨終の耳がすべてサツマイモの葉が日夜互いにぶつくさ言い合っている声ではないよな。

「納骨堂はお一人様二万三千からです、」開元（カイユアン）寺の和尚が電話で言った。ご自分でも一度来て下さいとも。祖父母はその堂の三階にいる。清明節のとき行ったが、堂内は暗くて運河の水みたいな色だった。

その後法華（ファーホア）寺には聞かなかった。しばらく経って、追い回される妄想を静めるため、この昔日の夢蝶（モンディエ）園にちょくちょくやって来ては暇そうな亀を見、納骨堂の前の木の椅子に座って堂の端に夕日がかかるのをぼんやり眺めた。残念ながら、世事は亀が暇なのにもとる。死人は生きている人間より饒舌になって大したものだ。葬儀の手続きがこんなものなら、裏庭の木の橋の下の亀に全部くれてやった方がましだ。ぼくは何度も何度も寺の名前を書いた。夢亀（モングイ）寺。妻はぼくがこれ以上法華（ファーホア）に行くことを禁じた。「家に帰って来る度、亀顔になったあなたを見なくて済むように。」

14

竹渓（ジューシー）寺海会（ハイホエイ）塔の表と裏を何度もうろうろすると、その堂は外側はごついが内側は柔らかいと思えてきた。ぼくの理想の納骨堂のイメージにぴったりだ。腹が出っ張った公共の建物みたいな隣の市立の納骨堂とは似つかない。

堂の守衛の老尼僧が鉄の鍵を開けて、ぼくを中に入れてくれた。東西南北下も上も灰色の壺の世界だ。老尼が小さな蛍光灯を点けた。壺の表面にはどれも一対の目が浮かび上がっていた。若い目は当然「今度はイケメンが来た。」と言っていた。年老いたのは笑って、「いい男だ独身の中年男[22]だね。」大正元年に生まれた婆さんは「両側の長い髪が耳を食べちまってるとこを見るとあれはきっと頭がおかしいね。」と言った。六十年代半ばにやって来たおじさんは、「馬鹿にしちゃいけない、彼が留めているのは今の時代の世界で流行っている歓喜のスイカの皮[23]だ、略して彼は喜皮（シーピー）。トラックのタイヤが私の自転車をなぎ倒して行ったあの日、私の頭が支えていたのも、この手の自由に髪を伸ばす喜阿皮（シーアーピー）だった。」

---

[22] 訳注：原文は「羅漢脚仔」（台湾語。「羅漢跤仔」（Lo-han-kha-a）とも）。古来、家庭、身分、職業、住まいなど何も持たなかった遊民の台湾男性を指した言葉。転じて、独身の中年男性を指す。
[23] 訳注：マッシュルームカットのヘアスタイル。

区分はABCDで、高い低いが配置を分け番号を分ける。白い紙に赤い字で値段が明記されている。九万から十五万、方角が違えば価格も違う。左も右も全部満席で、本堂の中央に一列だけ空きが残っていた。尼僧はぼくを前に連れて行き、空いた列の一番下のオレンジ色の壺を指差した。「これは最近ここに入った前の住職先生の、」その上の空いた場所は未来の住職大先生を待っていた。

死んだ人、金箔の仏像になって座っている人、燃えて仏舎利の琉璃玉になった人、——みんなでショーをして後世の人間の目を慰めることができる。この住職先生がここでうずくまっているのは自分勝手だし寂し過ぎるだろう。でも、彼は法名が眼浄だから、当然目は見えず浄められている。尼僧はぼくを上の階へ連れて行った。

二階は螺旋階段が場所をとっていて、黄土色の長方形の箱がいくつかあった。見た感じ整っておらず、おおかたその当時はまだ美しい壺の職人が世に出ていなかったのだろう。さらに三階に上がると、尼僧がリューマチの痛みが内腿だけだったのが今は心内膜まで広がったと言った。

そういうだるい痛さはわかる。ぼくは尼僧を慰めた。もし脳神経がレシーブしたらだるい痛みとは比較にならなくなる。三階はだいぶ明るかった。光線が二つの六角窓から入ってきて、ココナツの木の枝が空をパタパタはたいているのが見えた。尼僧は腰を曲げてD区二列六号を指差した。「そこは私が予約してるとこ、」空きの場所には楷書でくっきり二文字書かれた赤い紙が貼ってあった。妙慧。

ぼくは狭い空間を行きつ戻りつし、尼僧は横飛びで左右に行ったり来たりした。三階の値段は七万から十二万。正面の蓮の花の位置は最近埋まった。「どの方角も同じようにいいよ、」尼僧が言った、堂が建てられた当初占ったことがあるけど、どの方角もみな穏やかだった、位置によって値段が違うだけ。ぼくが最初に気に入ったのはB区西向き二列一号、午後に夕日が届くし、六角窓の空も見渡せる。ただ間に階段の格子が入るのが惜しい。監獄の鉄柵越しにぼんやり青空を眺める。

最後、一応六列一号に決めた。毎日、夕日の赤い光が母さんの顔を彩るだろう。普段は古いガジマルの枝葉とココナツの木の間の赤瓦を見ればいい。赤瓦の屋根の下は臨済正統清修道場だ。修行には八万四千の法門があるらしい。暇な母さんが修行する人たちの八万四千の姿勢を見るのもおもしろい。

尼僧がぼくに先に下りるよう言った。彼女の老体はさらに六階まで行って菩薩地蔵王を巡っていた。ぼくは彼女の腕が階段にしかとしがみつき、腰を丸めているのをじっと見て、そういえば小鹿(シアオルー)も密かにこういう心弁膜リューマチを患っていたと思った。先天的に過度に興奮してはならず、極度に達すると失神する。ぼくは堂の周りをまた何往復かぶらついた。母さんの真正面にある六角窓の枠には仏法を説いた言葉で「真如海湛」と書いてあった。椅子の背もたれには「円性空寂」。夕日の光が堂の上で一休みし、そこここで寺の軒下に吊るされた鉄の鐘の音が響いていた。ぼくは見れば見るほどこの納骨堂には言いようのない風情があると思った、——さすがは最初の寺だ。

15

「竹渓(ジューシー)」の名は、パリの「香樹(シャンゼリゼ)」とだけは比べようもない。尼僧が体にまとっている戒定真香[24]はシャンゼリゼ大通りの夫人の香水の匂いと比べてもいいんじゃないか。夕食後フルーツを食べ連続ドラマを半分寝ながら見て食器の後片付けをし化粧を落としてから、妻はドレッサーに置いてあるぼくの転居計画書を持ってき来た。

拾骨職人九千。風水占い二千。骨壺一万八千。納骨堂席七万。合計九万九千。別途雑費。

「ぐえ、」妻はまずげっぷをした、——彼女の好物の安平(アンピン)牡蠣もろみ炒めの匂いだ。そして、すっぴんの顔を傾けながらぼくを褒めた「こんなとてつもない移転プロジェクトを案外自分で進める力があったのね」。彼女はぼくは残りの人生「ベッドと裏庭の竹藪の間を行ったり来たりしてもぞもぞするしかできない」ものと受けとめていた。だが、ぼくは彼女に今日の放課後花屋に立ち寄って小鹿(シアオルー)に聞かずにはいられなくさせてしまった。「あの人女癖が出てまた最近よくあなたのとこに来て花を生けてるんじゃない？」

全部母さんがぼくにこのプロジェクトを任せてくれたことに感謝しなくちゃ、でなけりゃぼくは絶対痔になるまでベッドでごろごろ本を読んでたよ、とぼくは言った。奥子(アオズ)は三十分毎に跳ね起きて三分間回れと教えている。痔になりそうなところを肛門筋の外に放り出すためだ。ぼくは療養所で一人の入院仲間と知り合った。彼は痔の虫に強いられて深夜ベッドとベッドの間を歩き回っていた。肛門はしきりに「ワシャワシャ」という叫び声を上げていた。最後は、「同性愛治療法」を借りたお蔭でようやくその痔の虫を殺せた。

妻はプロジェクトの予算の数字を何度か暗算し、小学生が使うそろばんを引っ張り出してきて何度か検算した、——合ってる、九万九千、別途雑費。妻は雑費って何と根掘り葉掘り聞いてきた。ぼくの別の「雑費」の項には、線香とロウソクと銀紙[25]三百、会場で拾骨職人に渡す心付け六百、別途食費に飲み物追加五百……等々、等々。妻はつま先を眺めながらしばらくペディキュアしてないわ、ペディキュアしないと都会の女教師の足じゃなくて、田舎で農作業してる女房の足って感じだよね、と言った。顔用パックが一回八百に値上がりしてから、妻はパックしに出かけるのがもったいなくなり、自分でレモンの皮、オレンジの皮を剥いてパックしている。何度か口紅を使い終わったときも、王様(ワンヤン)水彩[26]を何色か混ぜて唇に塗っていた——妻が節約したその金は、ぼくたちの将来の赤ん坊の粉ミルク代、四歳に始める課外教育費のためのものだ。

妻は自ら一万元出してこのプロジェクトに投資した。母さんにぼくを近くで見守ってもらえるようにと。昼間妻はぼくが豚足麺を食べるのをよく学校で心配している。母さんが妻がぼくに注意するよう手助けしてくれてもいい。豚足の筋を飲み込んじゃだめよ、直腸

---

[24] 訳注：仏語。仏教僧侶の読経のことで、その際香(こう)を焚く。
[25] 訳注：冥幣と呼ばれるお供え物の紙幣。
[26] 訳注：水彩絵の具の商標。

を塞いでうんちが出て来なくなっちゃうから。

16

一晩中、ぼくは裏庭の軒下に座り、満月の光がビルの谷間に入って来るのを待った。満月の光は母さんの墓の上にも差した。がやがやとした市内のざわめきのうちに、風が墓の草の葉先をそよぐ読経の声が聞こえた。

二哥(アルガー)が言っていた。「おまえと同じ額出す」、ならば、二万になる。墓の草の鋭い歯が昔少女小鹿(シアオルー)の尻を噛んで怪我させたことがある。真夏の午後、彼女は百合の花を付けた丸い帽子を被っていた。同じく母さんの腹の中にいた兄弟だから、大哥(ダーガー)、まして経済効率で命の目標を決める人にもっと多く出せというのは気が引けた。じゃあ――つまり三万だ。小鹿(シアオルー)が結婚できそうもないのは、その年墓の草で切った痕が縁起が悪く、いつもここぞというときになると、その草が傷痕から立ち上がって風の中にいるみたいにざわざわと揺れ、葉先が妖気を漂わせるからだそうだ。

三万じゃ竹溪海(ジューシーハイ)会の納骨席の半分も買えない。それならぼくの枕元に供えた方がましだ。ぼくが食べるものと同じものを母さんも食べ、ぼくが南極に行けば母さんも一緒に行く。小鹿(シアオルー)はしょっちゅう言っている。あの頃もし何が何でも母さんに生け花を習っておけばね、今は喪中の家の花輪を生けるだけで心が無になる、あの頃療養所にこもってシラミを捕まえるのに数年もかけなくてもよかったのに。

海(ハイ)会が駄目なら、北園(ベイユアン)別荘に行くか。一人二万三千、風水は問わず、花蓮(ホアリエン)大理石二千、拾骨職人に包む九千が浮いて、合計三万四千。当時鄭経(ジョンジン)[27]があの北館を建てたのは、今日のぼくの母さんのためを考えてのことでもある。退院するとき、小鹿(シアオルー)がお祝いを五千くれたから、母さんは開元(カイユアン)別館に入れることになった。千はやはり小鹿(シアオルー)に花を買って送った。

携帯電話の向こうの大哥(ダーガー)を捕まえた。どこの空の下でわめいているのかは知らない。「開元(カイユアン)？　どこに行ってもいいが開元(カイユアン)だけはだめだ。おまえは薬をむやみに飲むなと言っても聞きもしないでだから生前あいつらがあそこまで言い争ったことを忘れてやがる。死んだ後まで向かいに座って顔を見るのか。」あの人は無駄に療養所にいた何年かに咲いた薔薇がほとんど灰色だったことを恨んでいて、ビジネスを譲ってぼくのために小鹿(シアオルー)花店のチェーン店を開いてやりたいと思っていた。妻は何でもさせてあげるけど小鹿(シアオルー)の知名度に乗じてやるのは駄目だと言った。その頃の数年あの人は毎週末山を登り峰を越え療養所を遠く眺めた。小鹿(シアオルー)はその無駄な時間を活用して自分を小鹿(シアオルー)名花に仕立てた。

ぼくは現世の恩義や恨みをほとんど忘れている。まして生前のことなんて覚えていない。祖父は普段自分を儒家の正統だと思っていて、日常生活を内聖外王[28]という手を使っていた。内聖がどこまでのものだったのか誰も知らないが、祖父の外王はいつも突出していた。家の猫や犬は祖父の足から一メートル離れておくことを理解していた。嫁の中で母さんだ

[27] 訳注：15 世紀、台湾を開拓し治めた王族。

[28] 訳注：内面に聖人の才能と徳行を備えており、対外には仁義に基づく王道の政治を行うこと。

けはその王様気取りの手は食わなかった。孫ではぼくだけが大人になっても顔を上げて[29]祖父を直視できた。人を煽れないと祖父は「儒を尊ぶことを知らない者は皆気がふれた外道だ」と罵った——心は孔子の乗った天狗に食われてしまった。道理で気がふれて心を病んだわけだ。母さんがもし早死にせず現世のこんな暴風を見ていたら気が狂うのも時間の問題だったろう。

17

次の日の朝、ぼくは行きたくなかったが婆羅(ポールオ)洲の外海まで旅していると、ドアへの襲撃と大声に起こされた。人が来て本人確認をし、帯で留めた十万をぼくに渡した。大哥(ダーガー)に電信で言いつかったとだけ言った。

すぐさまぼくという勇猛な騎兵は竹溪(ジューシー)寺のロビーに行った。中年尼僧が七万元を受け取り、帳面に細い字で一行書いた。ぼくは領収書をくれるのを待った。尼僧はぼくが何を待っているかわからなかった。「もしよろしければ、お昼の精進料理をご一緒にどうぞ。」ぼくは近道をして殯儀館の裏の小道に行き、松の木色[30]をした福棺の表面に浮かび上がっている艶やかなマツバボタンを遠く眺めた。

三太(サンタイ)は電卓を叩いて何度も計算し、「安楽(アンラー)有限公司」と明記した領収書を出してくれた。二万九千五百。はみ出した五百元は壺の表面にはめ込む母さんの小さなマグネット写真だ。ぼくは近いうちに母さんの写真を送ると約束しつつ、理想の黒心壺を見せてほしいと頼んだ。「あらまあ緊張しなくてもいいですよ私が島中隅から隅まで売り主のパンツの中までさらって押さえつけて——」棺置き場の部屋の奥から電話が鳴り響き、三太(サンタイ)は出に行った。世間の噂では安阿楽(アンアーラー)は正妻と二番目の妻を避けたくなると、すぐにその部屋に隠れるとか。療養所ではるばる見舞いに来た妻を避けるために、誰も下の世話をしてくれなくて自分でうぐぐとなる隔離室に隠れる人みたいだ。

三太(サンタイ)は部屋から戻って来ながら、両腕を胸の前で組んでいた。うつむき加減の顔には愛の殺気があった。ぼくが青春の頃秋哥六舅(チウガーリウジウ)の傍にいた走馬灯みたいな女の子の顔にそういう殺気があったのを見たことがある。「驚くことないけど黒心は至急発送して今は海の上で——」この声は熱湯の中でグラグラしている虫をすぐさま凍死させられるし、そのきつく寄せた胸の谷間は侵入してきたすべての敵船をぺちゃんこにする。

ぼくの入院仲間は一日に数回海溝両岸の攻防戦の演習をしていた。味方船も敵船も、彼が長年ぺちゃんこに叩き潰してはベッドの下で陰干ししたゴキブリだった。彼が顔中汗びっしょりで攻防していると、もう一人の入院仲間、生きた幽霊阿三(アーサン)が出し抜けに転げ落ちて海溝綿布団にひしと抱き着いた。ゴキブリ船はぺちゃんこにならずに済んだ。さもないとベッドの隙間の両岸の間でたちどころに肉弾攻防戦が勃発する。道々胸の谷間と綿布団の海溝とベッドの隙間のことを考えていると、鉄馬(ティエマー)のタイヤがひとりでに法華(ファーホア)寺の路地へ

---

[29] 訳注：昔、年少者は年長者と話をするとき、礼儀として顔を下げて話をしなければならなかった。
[30] 訳注：茶褐色。原文は「寿色」。唐の詩人・孟郊の詩「西上経霊宝観」にある「青松多寿色」（せいしょうじゅしょくおおし／青々とした松は長寿のめでたい色をしている）と関連があると思われ、「松の木色」と訳した。

と曲がって行き、木橋下の亀の溝のことを考えずにはいられなくなった。

少年時代は法華(ファーホア)の亀に夢中だった。この亀の祖先は夢蝶(モンディエ)夫人のペットだったらしい。あんなに体のでかいもんがその目で夢蝶(モンディエ)夫人の「語らざれば愁(うれい)無きに似たり」[31]な目を見たとは疑わしい。ぼくはしゃがむとも腹ばいになるともどっちつかずの姿勢で見るのが一番好きだ。瞬時に首を引っ込める亀のあの憎たらしくも可愛い動き、それに永遠に水面で固まった不動明(みょう)王のような様子——その後何年かぼくは狂人と自閉症患者の間でなんとか生きながらえようとしたが、すべては無意識に学んだ亀術に頼っていた。

いつ橋の両側に胸パッドを広げたみたいな鉄のネットが張られたのか。ネットの脚はどれも泥の中に差し込まれていて、ぎゅっと締め付けられた大きな乳房になっていた。ぼくはきょろきょろして大亀を探した。彼らはなんと中に亀が日向ぼっこする亀石をいくつか置き忘れていた。初めて大亀が亀石の上にでんとなって日向ぼっこしているのを見て、ぼくは「帝国」という語の概念を理解した——小亀だけが何匹かネットの上にへばりついて腹を夕日の西の空に向けていた。

慈恵室をそうっと通りかかると、折よく理事長夫人の大菜姑(ダーツァイクー)がオシロイバナの彫刻の椅子に背筋を伸ばして座っていたが、もう歳で目の下が少したるんでいた。というのも、みんな彼女が椅子に座っている後ろで嗔吶(さない)[32]やら懺悔のお経やらラッパやらで忙しくしていた。大菜姑(ダーツァイクー)は少女のようなあどけない声で笑って言った。「いつ亀が甲羅を水に沈めたか誰も気に留めない、ある日の夜更けに大亀が住職さんのお腹の上に這い上がった——」

18

ぼくはうつむき加減で食事をかき込み、胸の内ではどうやって鉄のブラカップの中に入ってしまった亀たちを救出するか画策した。「今朝荷物届けに来てたの誰？」妻は隣のおばさんから聞いたと言った。——あのめんどり小姑！　ぼくの内側は亀だった。昔、彼女はぼくが夜な夜なずっと起きて何を企んで何をしているんだかと妻に密告したのだ。今日になってもあの一重まぶたのパイナップルの目が夜な夜な刺竹の藪の中にはめ込まれる。

「ああもうまったく——」妻が夜中に怒っていた。大哥(ダーガー)がたかが一万元さえもぼくらには出させまいとするのだ。でもその浮いた一万で未来の赤ん坊に多少モンゴル語とチベット語を習わせることができる。情勢分析専門家の予測によると赤ん坊が大人になる頃には、モンゴル語とチベット語は大中国語に取って代わって世界の言語となる。ぼくは妻の太腿の外側の曲線を撫でながらいいさと言った。ぼくが旅行して見てきたところによると内モンゴルの青空が世界で最も青い青空だ。禿鷹みたいに羽を広げて太腿の内側の曲線を滑空しながら、ぼくはモンゴルとチベットの高原が高くてもぼくの目の前の恥丘ほどじゃないと思った。「——ああもう、」まったくという妻は玄関に高くそびえる人の頭に出くわした。

誰かと思えば二哥(アルガー)で、夜市に一緒に行くぞと大声を出していた。馬沙溝(マーシャー)の海鮮屋台で跳

---

[31] 訳注：何も言わなければ憂いがないように見えるものだ。白隠禅師の句。
[32] 訳注：チャルメラに似た管楽器。

びはねているエビを蒸し、サンマを二尾焼き、豚の睾丸[33]を二百元分炒め、もちろん米醸造酒維士比(ウィスビ)も忘れなかった。二哥(アルガー)は前に会ってから、胸に引っかかることがあって、毎晩よく眠れないと言った。跳びはねているエビはわざわざぼくに食べさせてくれるものだ。家族はみんなぼくに威勢よく跳ね上がってほしいと思っている。みんなぼくが道を歩くとエビの方がいいというくらいよたよたするのにうんざりしているのだ。奥子(アオズ)も元気よく跳びはねることこそ生活の秘訣だと言っている。徹底的に跳びはねれば、自然と不眠じゃいられなくなる。少し前にぼくは毎晩東海岸の秀姑巒(シウクールアン)口まで行脚し、夜明けに高い空と山頂に行って戻ると、果たしてその日はくたびれて夕方までずっと寝てしまった。「もしかして——」二哥(アルガー)は箸で睾丸を三切れつまんだ、「不朽体[34]？」

生涯で地上の睾丸を食べ尽くすなら、まっとうな人間になる甲斐もある。二哥(アルガー)はこれまでの人生を振り返った。昔工場を塗装していて、アミノ酸を目に吹きつけてしまい、丸々三か月半ほとんど目が見えなかった。息子は目が見えないとき暗闇の中生まれた。これまで「大人になった」息子にずっと気苦労が絶えないのも頷ける。その後仕事を換えて旋盤作業の工員になり、機械に親指を半分削り取られた。人差し指と中指は親指より長いがなぜいきなり親指だったのかはわからない。娘は指を切ったときに生まれた。これまでずっと毎晩仕事を終えて帰宅するとまずするのが、娘の親指の確認だ。数日前、環境保護局の人間が家に来たというだけで、吸盤社長は家のドアと窓を全部閉めろと命じた。自分じゃ聞こえない心臓の鼓動の音が外に漏れないように——、想像つくかな半生を元気よく跳びはねてきたエビが鍋に閉じ込められて煮込まれるのを！

「もし不朽体じゃないなら、おれたち息子はどうしてここまで落ちぶれたんだ？」今度奥子(アオズ)に会ったら、必ず言わなくては。米醸造酒維士比(ウィスビ)のさかなに睾丸を食べると、人生にはまったく言いようもない味わいがある。妻のおばは町でも有数のセレブだが、娘は青春の頃に死んでしまった。おばは娘に当時はまだ珍しかった銅棺を贈った。十数年後娘は何度も夢枕に立ち、水の中に浸かっていて冷たくてじめじめしていると言った。何度か迷った挙句とうとう銅棺を開けると、——青春の娘の様相だったが、その青春は棺の中で十年腐っていて、これほど見るに堪えない青春はなかった。ある蒸し暑い夕方、ぼくは赤嵌(チーチエン)楼の塀のところで旧友に再会した。驚いてなんだってそんなにぼくよりもひどい顔色をしているのかと聞くと、彼は死んだ妻と長いこと寝ているともごもごと言った。亡妻は彼の敷布団が熱く湿っているのを気遣って、日が落ちる頃彼に外の空気を吸ってくるように言う……

19

「不朽体のわけないよ、」ぼくは言った。

秋刀魚(サンマ)は頭だけ食べる。さもないと食べ過ぎて口を開くと秋の刀の殺気が出てくる。「不朽体はあり得ない。」二哥(アルガー)は大きな睾丸の目をじっと見た。世界の偉大な民族の救い主一代

---

[33] 訳注：台湾の料理。

[34] 訳注：聖人の遺体、腐敗しないと言われる。

の師匠だけが自分を不朽体にする力がある。ぼくの舌は口の中で跳びはねるエビを引き受けた。その年母さんが入ったのは杉の肌色の棺だった。そのときは漆を何層か塗る金さえ節約した。棺は地に置かれると鉄のきりで前後に風を通す穴が開けられた。——母さんの足の裏まで穴を開けられやしないかと冷や冷やした。今母さんに不朽体になってもらいたくても難しい。母さんはどこへ行ったらいいのかわからずに蠢いている虫に体の肉を返してもらわないといけない。

「賭けてもいいおまえは不朽体だ、」二哥(アルガー)はXO台湾を空け、酒と料理——豚の睾丸、油炒め、生姜ニンニク抜きでもう一つ持って来いと大声を出した。ぼくは兄さんが不朽体なのに賭ける、母さんの父さんも不朽体なんだから。二哥は小学五年のとき、人と話をしていた母方の祖父が、ワハハと笑うと同時に喉からある種「ブヒッ」とだみ声が出てきたのを目にして、後ろにぶっ倒れた。数年後に棺の中の祖父の全身が血色がいいのを目にした。チンピラのおじは忌々しくなってその場で怒鳴りつけた。子孫の血はみんなあんたに吸われて濡烏(ぬれがらす)色になっちまったんだよ。道理でおばたちは次々早死にしたわけだ。おじたちはチンピラ肉おじ以外はみんな竹竿みたいだった。

ぼくの口の中で、あなたの恥部を噛んでいる。思わずハミングしてしまう。奥子(アオズ)は人の不幸を望んではいけないという。気持ちが不安定なときは、ハミングに集中。——あなたは千回噛んでも飽きない。「おまえが不朽体なのに一万賭ける。」二哥(アルガー)は子供のときビー玉とめんこで賭け、青年のときは将棋と麻雀とルーレットで賭け、壮年のときは大家楽(ダージアーラー)と六合彩(リウハーツァイ)[35]で賭け、今夜は不朽体で賭ける——不朽体に賭けたこの瞬間、彼は哀しく楽しい中年に突入した。ぼくは彼の元々湖青色だった目が瞬時にして亀皮色の色合いに変わったのに気が付いた。

「ぼくはあなたが絶対不朽体じゃない方に十万賭ける。」けどあなたを飽きもせず千回噛む。

20

その夜、ぼくはXO台湾のペットボトルを腰にぶら下げて、地獄の裏口に身を隠した。見ると彼らが永遠に中庭で地牛[36]の腹くらい大きい鍋を作りながらあなたを待っていて、その中では千百万億の人がぎゅうぎゅうでも文句も言わずグラグラ煮立てられている。来る途中ぼくは母さんの姿がないかと目を見開いていた。一番あり得るのは母さんも大鍋の中で踊っていることだ。ぼくはXO台湾を取ってすねにかけ力を込めてこづいた——普段ぼくが一番嫌いなのはカマキリの後ろ足がないことだが、そういうときカマキリは大鍋の中に入ればいい。仕方なく裏の庭園に行くと、青いブラウスの若い尼僧がつま先で竹竿に乗りクチナシの花を取っていた。ぼくはさっと行って七、八個取ってやり、ついでに母さんに伝えてくれるよう頼んだ。「母さんが不朽体のわけがない方に十万賭ける。」

地獄門から戻っても豚足麺のことは後回しで、ぼくは三太(サンタイ)に写真を送った。三太(サンタイ)は写真

---

[35] 訳注：「大家楽(ダージアーラー)」、「六合彩(リウハーツァイ)」は台湾の宝くじ。
[36] 訳注：中国の伝説上の牛のような声をした動物。

を手に取ってしばらくの間目を細めて見ていた。「長いこと秋哥舅(チウガージウ)に会ってないけど、お姉さんも彼と同じで優雅できれいね。」「どうだろう、」ぼくはもごもごしながら言った、「不朽体ですか。」

「不朽体？」三太(サンタイ)は写真に目をやり、母さんを引き出しの中に入れて鍵をかけた。そして顔の肉で媚びた表情を作った。拾骨は簡単だけど、不朽体の場合は大掛かりな仕事です、費用は別途。でも、不朽体もたやすいものじゃないわね、百人に一人もいない。安楽(アンラー)公司も一度こういう仕事をしたことがあった。ある若者が過労で死んだ妻のその若さを少なくとも十年保ってほしいと言ってきた。安阿楽(アンアーラー)は胸を叩いて自社の防腐技術は市内でも一流であると保証し、その場で併せて「不朽を十年保証する」契約書を交わした……「あなたのお母さんみたいにきれいだった、」ぼくが鉄馬(ティエマー)にまたがると、三太(サンタイ)は甘ったるい声で言った。「不朽体でも見た目はちょっと劣るわ。」

せっせと水仙(シュイシエン)後宮まで自転車をこいで行くと、六舅(リウジウ)がちょうど祭壇前のコンクリートの地面で大きな洗面器で腰巻きを洗っていた。その腰巻きの赤色の中にはいくつか白くなったところがあった。「いつも急にトイレットペーパーが見つからなくなる、」六舅(リウジウ)は揉み出しながらぶつぶつ言った。「間に合わせでつかんで尻の下に敷いた、——まったくこしけ[37]がこんなにひどいとは思わなかった。」ぼくは洗面器の傍にしゃがみ、六舅(リウジウ)も母さんの拾骨葬儀に参加してくれるよう頼んだ。「やる——」六舅(リウジウ)は腰巻きを目と鼻の先に近づけた。「おれはやる——また破いちまった。まったくなあ言ったことあるけど、世の中で最強の毒はこのこしけ猛毒だよ！」

表具工房に行った後花屋に行った。楷書で花好月円[38]と書いた四角い字が中央に掛かっていた。小鹿(シアオルー)はシャクヤクの花束を二つ抱えて来て持って帰って母さんに供えてちょうだいと言い、ぼくの袖を引っ張って花を入れた。「むかつくわ最近胸がストレスで小さくなったわよ——」果たして前は自慢だった二十世紀梨が今は水分が減って白レンブ[39]になっていた。

21

妻が瑞々しいアボカドを二つ切ってベッドまで持ってきてくれた。ぼくはさっき外のフルーツ屋台でレンブを二個立ち食いしたと話した。レンブは美しい頭だ。妻はやっぱり梨は水分が多くて、消化を助けてくれるし美容や内臓にもいいと言った。「今回二哥(アルガー)とあなたは何を賭けたの。」妻は二嫂(アルサオ)[40]にアドバイスしたことがある。外省人の兵が銃を手入れするのに使うような長い通し棒に、菩薩が座っている蓮の花の油を付け、喉から尻の穴まで通せば、必ず賭博旦那のギャンブル癖を取り除ける。「二哥(アルガー)は母さんが不朽体である方に一万賭けた。ぼくは絶対不朽体じゃない方に十万賭けた。」

枕の上にぼくの脇の下があって、梨の果汁がぼくの脇毛の先を濡らした。「不朽体の何が

---

[37] 訳注：細菌性膣炎によって生じる分泌物。
[38] 訳注：円満の意。
[39] 訳注：東南アジア原産のフルーツ、別名フトモモ。
[40] 訳注：二哥(アルガー)の妻。

そんなにすごいのよ？」妻は梨をちびちびと齧った。妻のお母さんが不朽体だった。不朽体になったのは妻の親父さんの風流のせいだ。妻の親父さんは開けっぴろげで大雑把なタイプのならず者で、お母さんは別の女の体の上で開けっぴろげで大雑把になっている親父さんを目の当たりにしたとき、その二つの骨盤が互いにぶつかる激しい音に心を折られた。親父さんは忍びなくてあちこちでお母さんの好きだった草花を取ってきて棺の中いっぱいに入れた。お母さんの葬儀から三日もしないうちに、親父さんはまた遠方から葬儀に参列しにきた女の肉体の上に登った。その女の股間からは棺の中の草花の臭く香しい匂いが流れ出ていた。それに続いて彼女がキッチンで作っていた台湾バジル入り卵焼きの匂いがそれを凌いだ。――その後どの女も同じ腐った草花の匂いがしていた。もみあげに汗がしたたるとき、親父さんが向き合うのはお母さんの不朽体だ……

ぼくは両足を突っ張って、妻に騎乗位で力仕事をさせた。不朽体がもしこんなふうにきれいで見応えがあるものなら母さんの不朽体も無駄じゃない。ぼくもならず者だが、小さくちまちましたタイプだ。小さくちまちまとあなたに細々と、でも先の長いものを約束する。土石流の勃発から股間の旱魃になりどうしようもなくなるようなタイプじゃない。妻は、同僚の女の子がいて、二、三日毎に腰骨が少し避けそうになっていて、その子ががに股で教室や廊下をずるずる歩くのを見ると可哀想になると言った。何年か経ち、ぼくの人生計画は妻と一緒に曽文(ゾンウェン)渓の水遊びスポットに運ばれた。この細く長く続く流れは都市の皆さんに冬も夏も計画断水の必要がないことを保証する。

「もう水分がなくなって干からびそう……」妻が弱い声でふうふう言った。ぼくが腹を震わせ一吠えしてこの長い愛の仕事が終わろうというまさにそのとき、玄関のところで大きくて重い車の音が止まったのが聞こえた。と同時にダダドン遠慮なしにダダドンいうのが聞こえた――

22

大哥(ダーガー)が一日ぼくらの近所の目覚まし鳥になって、ダダドンダダドンだったことを詫びるのはめったにないことだし、竹藪の中のあの一重まぶたパイナップルの目が今朝一時間早く休めるのもめったにないことだ。大哥(ダーガー)は昨夜、南の山間(やまあい)で、あるボスの五十歳の誕生日パーティーに出た。その宴は星空の下に用意された五千万くらいの席を五千くらい万の人が埋めた。ホール係はチーフから配膳担当まで女子高校生で、皆初潮の血の色をした口紅を塗っていた。大哥(ダーガー)が母さんの大計画を気にかけていなかったら、きっと女子高校生の後についてそこに残り、列に並んで若いタケノコを食べていただろう。「タケノコは虱目魚(サバヒー)の腹よりも柔らかい、」妻は朝市に行くことにした。ぼくはそのとき宣言した。今日の朝と昼は菜食、夕食は問わない、――尼僧の言いつけだ。

六時きっかり、妻は寝ぼけ眼で、ぼくたちは出かけた。銀で作られた「便池(ベンツ)」がシルバーグレーの続く街道を突っ切った。六時九分、二十四時間子供ココナツ屋台の傍で二哥(アルガー)を拾った。

市場の路地の入り口で停まり、六舅(リウジウ)が中の水仙(シュイシエン)宮前の階段の上にしゃがんでいるのが見

えた。ダダドンダダドン。六舅(リウジウ)は猫背になってやって来て両手で何か供え、肘のところには線香の煙がゆるやかに立ち上っていた。着ているシャツは、花柄で肩の後ろから腰のところへ二匹の黒龍が躍り出ている。六舅(リウジウ)は自分のような老いぼれが人生で初めてベンツに乗ることにため息をついた。このドイツベンツに鎮座するため、六舅(リウジウ)は昨晩遥か安平(アンピン)の結拝兄弟壇まで行って小尊地蔵王に来てもらっていた。地蔵の黒檀の煙と張り合うため、二哥(アルガー)は長寿(チャンショウ)[41]に一本火を点け、大哥(ダーガー)の方は口に細長い豪邁士威爾(シウエル)[42]を一本くわえていた。

七時きっかり、遠くに安楽公司の名前の下で待っている二人が見えた。肩は広いが腰つきはほっそりとした外省人で、赤い布の装飾を付けた赤い鳥打帽を被ったその中年は、一見してすぐに本物の獅記(シーヂー)の拾骨職人だとわかった。彼は傍の、西部の原色のカウボーイハットをかぶり、肩に大きな麻袋をひっかけ、腰に長い柄のスコップを当てた、阿里(アーリー)山羊羹[43]みたいな若者を獅記(シーヂー)の見習い兼助手だと紹介した。——この見習いはぼくのプロジェクト計画外だ！　「ぼくは電車に乗りますよ、」ぼくはおとなしくベンツを降りた。職人たち二人はベンツに乗った。ベンツは飛ぶように去ってすぐに飛ぶように戻って来ると、軽食みたいにぼくを駅まで送り届けた。

23

ぼくは売店で最新号の旅行誌を買った。特集、失われた天国の島。人という万物の霊とやらは遠きも近きもどこへでも行く。行ったのは書架の下の大小さまざまな形のプールだ。天国はゆっくりとプールの中へと消える。奥子(アオズ)は、天国の島のあらゆるプールで小便をしたことがあると言っていた。妻は洗面器は洗うために使うもので小便をするためのものじゃないと何度かぼくに注意した。でも小便は腹を空にするためだ。空になった腹はふわふわ浮くのに便利だ。洗面器は浮くトレーニングをするのにちょうどいい場所だ。もしあなたが洗面器の中で浮くことができたら、この飛び去ってゆく電車の中でも浮くことができる。とするとあなたは今天国の島のどれかのプールに浮いている。

十九年間、母さんの家は紅毛埤(ホンマオ)の下の八掌溪(バージャン)河床だ。母さんが浮かんで、八掌溪(バージャン)沿いに下っていって、河口に出られたら、ぼくたちはすぐにエーゲの天国のプールで落ち合える。ベンツの中の人たちには「空(から)の棺のデート」に行かせる。平和なときには空の棺が多いらしい。中に横たわるのは多くが五体満足な人だから。蒸し暑い午後夕方、皆連れ立って市立や個人クラブのプールに浮かびに行く。冬、とくにシベリアから寒気が来ているときは、皆二十四時間大夜市の炉端にいる。そのうち少数の人たちはコンビニの電子レンジの前にいる方を好む。

とある健康法がある。こういう浮かぶ人たちや炉端の人たちの間で広まっている。一時期、母さんは朝四時に起き、裏庭のグアバの木の下に清水を十二杯並べていた。清水は人間の体にある重い気の汚れを洗うことができる。たくさんの清水でトイレが近くなる。何

---

41 訳注：台湾の煙草の商標。
42 訳注：煙草の一種。
43 訳注：台湾の菓子。羊羹の濃い褐色を日焼けした人肌の色に例えている。

物も何かに役立ち用途があるから無駄にしてはならず尿もここで循環する解毒剤になる。飲んで空けたコップに尿を最後の一滴まで惜しんで入れ、そして尿一口分を清水三口分と合わせる——母さんは腎臓がむくみ、くるぶしの下の指の関節に浮腫ができるまで飲んだ。食卓で、母さんは箸で魚の腹を取ろうとして二、三回失敗した。「今日は虱目魚（サバヒー）の腹の皮にまで馬鹿にされるとは思わなかった、」母さんは目の縁を赤くしていた。

母さんの浮腫の痛みがひどかったとき、六舅（リウジウ）が一度町の三姓元帥[44]を連れて電車に乗り、嫁に出た娘にはるばる会いに来た。元帥は沙盤[45]のところに座ってひたすら占っていたが、夜遅くになってようやく木の筆でいくつかの結果を書き出した。残念ながらそのとき六舅（リウジウ）はそれが何なのかわからず、言えたのはどうやら「人にまとまわりつく」悪霊らしいということだけだった。彼らチンピラ世界の人間はこういう悪霊に出会うと、どうしたって足にまとわりつかれるのだった。次の日の朝母さんは早く起き、ムフフと笑いながら裏庭で鶏を捕まえたが、手に力がなく鶏の首に七つも八つも傷を付けてようやく血を抜いた。元帥は鳥のスープを飲んで、車をチャーターして町に戻った。母さんはまた市場に行き、昼食にエビとヘチマの粥を作った。食後は夕方まで小麦粉で三角紅豆マントウを作った。

悪霊は母さんの中に入り込んで活動した。母さんは水槽と地下排水溝をきれいに洗い、午後ずっと裏庭で腰掛けの上に乗って枝になっている熟れたグアバを摘み取り、表の庭のドライマンゴーを漬け、新しく葡萄棚を建ててオータムロイヤルの葡萄を植え、ぼくたちのために破れた制服を全部繕い、虱目魚（サバヒー）と土殺（ヒレナマズ）[46]とカエルをもっとたくさん食べ、尿を合わせた水をもっとたくさん飲み——六日後の朝尿のコップの上に倒れ込んだ。長いベンチの上で清水のコップが七つ、空のコップが四つ、気を付けをしていた。

24

ぼくは紅毛埤（ホンマオ）の堤防でタクシーを降り、恨みがましく春の草の揺らめく池の水、遥かまで重なり連なる遠い山を見た。幼い頃、いつの日かあの山の知られないところに入っていって二度と戻るまいといつも考えていた。大人になってから都会の深い穴に沈んでしまうとは思いもよらなかった。穴の底から苦労して療養所まで這い上がったが、療養所の後の足ではせいぜい家の枕に登るくらいだった。

ベンツは乳牛牧場の囲いとバナナ園の間で停まった。乳牛の体の模様はオランダから来ていて、バナナの曲がり具合はフィリピンのルソン島から来ている。人は墓碑の石と奔放な草の間にいる。縁起のいい九時五十分から十時十分に鍬（くわ）入れをするのを待っている。黒い地蔵が鎮座する墓の庭の前のココナツの木の下、六舅（リウジウ）は近くの塚の間で何を探しているのか背伸びしたりかがんだりしていた。

赤頭職人がこの墓園の風水はよろしくないと言った。一つには正面から墓碑の水が頭にかかり体を押さえつける。二つには背後に窪みが広がってむき出しの川床になり頼る山が

---

44 訳注：神降ろしの巫術を行う神職。

45 訳注：元帥が神を降ろして神の諭す吉凶を書くための、砂を入れた盆。

46 訳注：ヒレナマズ科の淡水魚。ウォーキングキャットフィッシュ。台湾の俗称で「土殺」、「土虱」ともいう。なお、原文では「土殺」の「殺」の字は魚偏が付く。著者の造語、言葉遊びと思われる。

ない。とくに庭の前のココナツは往来する道を妨げている。ちょうど三兄弟で一人道を一本塞いでいる。大哥(ダーガー)は昔買った株がいまだに空振り株券で、壁で食後のダーツの的になっているとため息をつく。二哥(アルガー)は「宝くじ」に何年も命がけで挑んでいるが、よく当たる幸運の番号の一枚を一度も手にできていないことにカッカきている。ぼくは昔、家の裏庭に立つと、船が台江(タイジアン)内海から安平(アンピン)の港へと帰り着き、海に映る夜の星が遠くまでも見えたのが忘れ難いが、今は首を伸ばしてビルの谷間に月を見るくらいしかできない。妻はそのうち頭からどてっと転ぶわよと言った。

九時半、職人はまず土地を拝み土地公の金[47]を燃やすように言った。ココナツの木を通った。母さんはぼくが少女だった小鹿(シアオルー)の腰を引っ張って歩いた堤防を見ていた。満月の光の夜、冷めやらぬ熱い青春の飛ぶ自転車が堤防の上を追いかけて来た。六舅(リウジウ)がやって来て川床に下りて玉石を拾って、持って帰って小太子(シアオタイズ)に箱庭を作ってやりたいと言った。療養所のベッドに横たわっていた最後の年、ぼくはしょっちゅう、この墓園の傍の木の家に引っ越して暗い夜渓流の水がさらさらと流れ草の葉先や木の枝の静かな声を聞くことを夢想した。六舅(リウジウ)はきっと何かに会ってしまうとでも思ったのだろう。地蔵菩薩の目が六舅(リウジウ)の代わりに見ておいてやると言った。妻はこっそりどこかへ行こうとしちゃ駄目と事前に言った。「——俺が乳牛の乳しぼりができるわけでもないし、そこへ行って何するんだ」六舅(リウジウ)は少女時代の母さんに会っている。後に不良少年が大勢不良少女を家に連れてきたのは、姉の美貌と張り合わせたいがためだった。

墓の囲いにスコップを深く入れたが、棺はまだ見えなかった。二哥(アルガー)の紅肉李(スモモ)[48]みたいな赤い顔がやや暗くなっていた。拾骨獅はなくなってしまった外棺に沿って、長方形の窪みを掘るよう助手に指揮した。それから自分がその中にしゃがむと、小さなスコップで少しずつ土をすくった——誰も口を開いて質問しようとはしなかった。だがぼくたちは皆疑っていた。棺の木片さえ朽ちてなくなってしまった、まさか本当に昔の人が言ったとおり「すべて塵と泥の中に消えてしまった」のか。疑って見開き過ぎて疲れた目を上げると、深い渓谷の水で陽の光がきらきらと散るのが遥かに見えた——待ちきれなくて母さんは自分で引っ越したのか？

25

「それは頭蓋骨じゃないか！」二哥(アルガー)が驚いて叫んだ。

ぼくたちは寄って土の枠の上にしゃがんで見た。助手がすぐに職人に黒い傘を手渡した。拾骨獅はカラス傘を持つと、傘を左右に揺らしながら唱えた。天皇皇(ティエンホアンホアン)、日皇皇(リーホアンホアン)[49]。カラス傘はあなたがまた陽の光を見ても目が眩まないようにあなたを守る。刷毛で細かい砂を払った。——完全に髑髏(ドクロ)の映画で見たような骸骨の頭だった。二哥(アルガー)のさっきの驚きの叫びには胸のつかえが下りたような和らいだ気持ちがあった。——伝奇に出てくる家路を急

---

[47] 訳注：民間の土地の守護神「土地公」が神の世界で使うための紙幣。「福金」ともいう。
[48] 訳注：台湾語。セイヨウスモモ。
[49] 訳注：拾骨儀式で唱える呪文。

ぐゾンビじゃない。

「拾いますよ、」いたずら小僧ができたばかりの花のつぼみに向かうように、拾骨獅は下あごから一本の金歯を取った。「ごらんなさい、純金は悪くなってない、」いかにも嬉しそうに見せると、「記念に持って帰る価値がある、」だが誰も手を伸ばそうとしなかった。金歯がぼくの目の前に現れたとき、ぼくは反射的に腕を伸ばした——金歯が手のひらに落とされ、指がしっかりと握った。

悪くなっていないものは他にナイロンの死装束もあった。頭から下を黒光りして足まで覆っていて、襟元には真っ白な胴裏が見えていた。骨獅は頭を持ち上げ、何度か裏返して見ると、下顎が虫に食われているが、顔はまだきれいだと言った。助手が麻袋を取って来て、二哥(アルガー)が手を伸ばして受け取った。助手は二哥(アルガー)に、両肘を膝につけば、膝の開閉で袋を開閉できると教えた。骨獅が頭を袋に入れようとして、突然ぼくの手に預けてきた。「これは——最後に入れて、」人の体は大事だから頭を潰してはいけない。

「頸椎七つ、」骨獅は大きな声で皆に知らせた。それから物が一つ残らず袋の底に落ちぶつかる音が聞こえた。直に死装束の襟の中に手を入れた。「鎖骨二本、」骨獅は自分の肩と比べた。「女の鎖骨はきれいだ、」きれいだがやはりぶっきらぼうな手で麻袋に入れられ、袋の口で重なって中に落ちた。「肩甲骨二つ。」大哥が手を伸ばして遮った。肩甲骨には小さな草の若い芽がいっぱい這っていた。その後の、胸椎もどれも同じように繭の糸のような草が這っていた。「胸椎十二。」大哥が聞いた。何の草がこんなに——？　骨獅は腰椎に触り、野草だ、すぐに骨孔に入り込む。幸い野生の藤じゃなかった。彼は野生の藤が脊椎全体にまとわりついているのに触ったことがある。あなたは骨一つ動かせない。もし骨を立たせようとしたら——。腰椎は五つあった。その後左右の手で肋骨を一つずつ掴み出した。「誰か両側とも十二本ずつあるか数えてくれ、」そしてまた言った、「数えなくていい間違いはないだろう、」カラカラと麻袋に入っていった。

ぼくは右手の中指と薬指と小指で金歯をつまんだ。人差し指と親指はへばりついて、目と鼻の窪みの中の土にへばりついていた。水辺に近くて湿気があるからかもしれない、顔は母さんが毎晩寝る前に飲んでいた、血液を補うトウキ[50]汁の色合いみたいな、赤茶色をしていた。ぼくは左の手のひらで頭蓋骨を包み、後頭部に沿って、少しずつ起こした。その感触と曲線にぼくの手のひらの肉に入って記憶になってもらう——小さい頃母さんもこんなふうにぼくたちの頭をなでてくれた？　人差し指はそっと下顎をたぐって、頭の側面に貼りつき、もぞもぞと中に入っていった。いつまでもぼんやりしてしまうほどの、空洞だった。

26

大哥(ダーガー)がスコップを受け取って、力いっぱい叩きつけた。墓碑が折れて墓庭に落ちた。母さんは墓庭の前のしっかりと口を縛られた麻袋の中にいた。ぼくたちは六舅(リウジウ)が戻って来るのを待った。職人が聞いた。墓碑の本籍に「台南」と書かれているのはどうしてですか？

[50] 訳注：薬用の植物。

彼の拾骨人生において、見たことがあるのはただ泉州（チュアンジョウ）、詔安（ジャオアン）、厦門（アモイ）、潮州（チャオジョウ）……。ぼくたちは地面の碑の下にある大きな「台南」の二文字を見ていたが、誰も答えなかった。

墓碑の字と墓庭の対聯[51]は、祖父が工筆[52]で書いたものだ。祖父が健在だった頃を思い出してみると、おおよそこういう質問をした人はいなかった。祖父はいつも、台南北門出身で終戦の年に田舎から町に移住したと言っていた。母さんの実家は台南北門からやって来た。母方の祖父の世代はすでに町でしっかりと生計を立てていた。生涯儒家を自負していた祖父が、自分の本籍の出所を知らないはずはなかった。嫁入りさせるときに嫁の実家の本籍の出所が重視されないことはあり得ない。祖父はもちろん「厦門（アモイ）」や「同安（トンアン）」が墓碑文化の決められた習わしであることをわかっていた。母さんが死んだのは、祖父が七十になった年だ。退職して繁華街の一角の静かな路地裏に蟄居していた。祖父はまず古新聞に何回か試し書きをし、その後幅広のきれいな白い紙に工筆で書いた。台南。

六舅（リウジウ）は墓のところでぐずぐずしていた。左右の手には一つずつ袋を提げていて、右肩が明らかに下がっていた。不良少年六舅（リウジウ）には若い頃の習性が残っていた。右手は力仕事をし、左手は繊細なことをするためにとっておくのだ。六舅（リウジウ）は川床のところで養豚をしている人から飼料の袋をもらって来た。小太子（シアオタイズ）が遊んで置いていった玉石は、六舅（リウジウ）が自分で星宿様[53]が夢枕に立って落下させた隕石に加工できる。六舅（リウジウ）は墓庭の前に跪（ひざまず）き、麻袋の中の母さんに向かって数回頭を地面に付けて礼をしていた。自分が子供のとき母さんが苦労して彼をおぶって中庭のガジマルの木にいた鳥を捕まえてくれたと懐かしんで話していた。それから世間慣れした兄貴の口調で、職人と助手の二人の職人技を褒め称えた。秋哥大（チウガーダー）と兄弟安阿楽（アンアーラー）の友情と義理はなくなっていなかった。

二哥（アルガー）が肩で母さんを担ぎ、大哥（ダーガー）が線香を手に取って先導した。墓庭を出、バナナ園を通り、ベンツに乗った。母さんは助手席の敷物の上に座った。その上で二哥（アルガー）の手の中の絶えることのない線香が、母さんが高速道路を走って台南の実家に帰るのを先導する。乳牛牧場の前でぼくたちはひとまず別れた。ぼくは反対方向の増水を逃がす道の傍の小道を通って堤防に上った。春の草が延々と続きざぶざぶとした水の先は霧の濃い山々だった。岸に下り、しゃがんで固く握った拳を水に浸した。目を閉じると、母さんの歯が濡れてくるような気がした……

27

歩いて紅毛埤（ホンマオ）を出て、途中で飲料の露店で座って休み、レモンジュースを飲んだ。バイクから若い男女が数人降りてきた。制服を着た専門学校生で、みんな蜜豆かき氷の大盛りを注文したが、一人だけ青マンゴー果肉入りかき氷を注文した。

その青マンゴー果肉を含んだ唇はぼくの斜め前にいた。ある種の波の揺れが、唇の端から起こり、ゆっくりと頬に至る。その頬の肉は、しきりに波の外に躍り出そうになり、ま

---

51 訳注：縁起のよい対句。
52 訳注：細密画法。
53 訳注：「星宿」は古代中国の二十八の星座・二十八宿。星を神格化して敬称を付けた言い方。

た内側では何かがきりきりと叫んでいる。ぼくは少女の顔をじっと見た。ゆっくりとその顔のふくよかな内側に入り込み、母さんの骨を見る。ぼくは懐かしく母さんの骨を感じた。あんなふうに滑らかでふくよかな肉を欲している。ぼくは母さんの骨と化し、夢中で少女を見つめた。いや、少女個人全体ではなく、少女の美しさや性格ではなく、静物のような目、鼻、頬の肉、まくった袖から出ている腕、膝を覆う青いスカートの下の太腿の肉……その子が舌先を少し出して唇の端の果汁を舐めるまでずっと見ていた。

うなだれて晩春の正午の陽の光の中を歩き、ひたすら意気消沈しながら左右に滑る瑞々しい舌先のことを考えた。「永遠に存在が消滅し二度と見ることのできない日進月歩の食品目録の」母さんの舌先を思うと、踵が重くなり足の裏にアスファルトの路面が粘ついてきた。この転居プロジェクト計画には取り返しのつかないミスがあった、——母さんの血と肉はついさっき遺棄したあの墓穴に留まっている。墓園のすべての草木の枝葉には母さんの血と肉の養分が溶け込んでいる。不安になって踵(きびす)を返そうとすると、「パーッ」と鳴る音に驚かされ、一台のタクシーがゆっくりと目の前で停まった。

駅のホームの人込みの間に、ぼくはすぐに黒のタイトスカートをぴっちりとさせた脚を見つけ出した。脚はホームのベンチの上で交差し、スカートの裾の中の曲線から出ている暗い影がかえってこぼれる肌の白さを引き立たせていた。母さんの大腿骨は、少しの贅肉もない素の姿に戻ってしまった。大腿骨が麻袋に入れられたとき、まるで枯れ枝みたいになおもしつこく葉を名残惜しんでいる気がした。あの満月のようにふっくらとした太腿のすぐ後について車輌に乗って斜め後ろの席に座った。勇気がなくてちらりとも見られなかった。交差している脚、左右を組み替える脚、膝をきちんと揃えている脚、たまに開く膝を戻す……

28

電車を降りると乗り換えて真っ直ぐ夜巴黎(イエパリ)[54]に行った。午後の夜巴黎(イエパリ)は普通の家のような静けさで、中年の女が長いベンチに座り壁にもたれ、ベンチの縁に足を乗せて居眠りしていた。中の壁に額縁に入った娼婦の写真が並んでいる下で、白いスーツを着た長い髪の女が腰を少し曲げて水槽で何かを洗っていた。ムッチリと生地が張った豊満な尻にはくっきりと黒いショーツの線が見えた。居眠りしている女がうっすらと片目を開けてまた閉じた、「柚阿子(ヨウアーズ)、お客だわよ。」

女はぼくに尻を出してベッドの端に座るように言い、洗面器を右手で高く持って来て、左手でぼくの下半身を洗った。二つの丸い乳房の肉の白さが襟元で揺れた。ぼくはほとんど無意識に手を伸ばし入れ、すぐさま手のひらいっぱいに乳房の肉を鷲掴みにしそうになった。女は、これは自分で決めたルールだが、男が何日も溜めた汚い尿を自分の中に一緒に出すのは耐えられないと言った。「柚仔(ヨウザイ)、」ぼくはわかったと言い出せず、心身の注意はすべて手の中の肉に行っていた。「柚仔(ヨウザイ)、」ぼくは倍の金を払うから、好きに肉をつかませてほしいと言った。

---

[54] 訳注：台南の風俗店。

「柚仔(ヨウザイ)じゃない、みんな柚阿子(ヨウアーズ)と呼ぶ、」果たして黒いレースのカップの下からこぼれ落ちた二つの乳房は大きくて丸い白柚(ザボン)のようだった。女は、あんたみたいな色白で大人しい人はめったにいないし、私の体の肉に心底夢中になる人もめったにいないと言った。ぼくは下唇でザボン乳房の重みを念入りに味わい、それから乳輪の肌に目を当てて摩り付けた。柚阿子(ヨウアーズ)は自分のザボン胸は何となくできたものじゃなくて、小さい頃から家の裏の土地の半分が白ザボン栽培の専用で、収穫のときには一つ一つ腰を伸ばして抱えて牛車に乗せていたから、長い間そうやって厚い胸質ができたのだと話した。——十九になって都会に出てきて加工工場で大浴場に入ったとき、女子たちは皆彼女のザボン胸を羨んだ。ぼくは鼻先を突っ込んだ、折り重なっている乳房の肌に。母さんの胸椎は感じられなかった。

ぼくは女の草の茂みの陰毛の間に隠れ、こっそりと母さんの金歯を口に含んだ。太腿の内側の奥に埋もれながらちぎって噛んだ。脚の間からはある種排水の沼みたいな殺気が立ち上っていた。——その後女の腹の肉を噛んでいると、女は息子を持ったことがないと言った——今日女はぼくをゆかりもなくこの世に生まれてきた息子のように感じた。ぼくが臍の穴から中に入ると言うと、女は入れるならどうぞと言った。入ったら永遠に出て来られない。二度と来られない。でも大丈夫入ったら永遠に出られないんだから。

29

棺の前で、皆が輪になって陳年老人茶を飲んでいた。大哥(ダーガー)が珍しくぼくの顔色がいいと笑った。ある種の紅潮、小鼻から頬骨に広がって。ぼくは来るときいい天気だったし向こうで疲れたとだけ言った。「途中女性といいことがあったのかもしれないね、」三太(サンタイ)の甘い声、ぼくは目の端で今日彼女がぴっちりしたフィットネスウェアのトップスを着ているのを捉えた。その服の上に胸の谷間が乗っかっているかには注意がいかなかった。

母さんは今獅記(シーヂー)の秘密の焼窯にいる。ベンツを降りると、拾骨獅は麻袋を提げてスクーターに乗り、彼の秘密の焼窯に向かった。町の人の話では彼の焼窯は好きな大きさの形、色に焼き上げることができるそうだ。——ついさっきぼくがある種こもった焦げた匂いを感じたのも無理はない。二哥(アルガー)はここで二時間以上茶を飲んでいると文句を言った。大哥(ダーガー)がテーブルに並んでいる精進料理のちまきや餅を食べろと勧めてくれたが、ぼくは首を振り、内心で答えた、「——母さんはもう食べたよ。」

拾骨職人が黄土色をした硬いボール紙に包んだ箱を持ってきて、開けた。写真の母さんの顔が黒心円の質の上にはっきりと白く浮き出ていた。職人はぼくたち兄弟に一人ずつ線香をあげるように言った。それと同時に叫んだ、「母さん！　堂の席に入るよ！」ぼくは壺を持ち、車に乗り、母さんを腹と両足のところにしっかりと置いた。陽の光がガラス窓から差し込んできて、真っ黒な壺の表面で肉眼ではほとんど見えない細かい紫になってきらめいた。

経をあげる尼僧がもう堂の前で待っていた。午後三時の静寂は、読経の声などないようで、風が葉の間を通り過ぎる音もしなかった。母さんは黒心円の中に腰を落ち着けた。背後はどこまで深いかわからない堂の海だ。ぼくは合掌した。「母さん、——それじゃあ。」

一瞬母さんはぼくに向かって瞬きした。

30

空が明るくなるまで電気を点けていた。蛍光灯の下、母さんの金歯の両側にはそれぞれ白い歯がはめ込まれていた。その異様に長い歯はきっと土の中でタケノコを吐く。タケノコはただそこかしこで長年褐色の朱肉に漬かっている。妻が一度だけ入って来て、ぼくの枕元にヒョウタン型の小さな赤い布の袋を置いた。出て行くときの視線が言っていた。あなたが珍しい物を持って帰って来るなんて誰にもわからないわよ、人に見せたくないなら自分の宝物にしとけばいいわ誰があなたの宝物を見ようとするもんですか——。

朝、声のでかい鳥に起こされた。「クリカボチャジュースは希少ジュース」、「クリカボチャジュースは希少ジュース」、おおよそ鳥が新開発した一種のジュースで、朝っぱらからあちこちで人に知らせているのだろう。鳥の大声を聞き、起きて裏庭を一万二千歩歩いた。口で「クリカボチャジュースクリカボチャジュース」とぶつぶつ言った。何も言えなくなりそのクリカボチャジュースと溶け合って一つになるまで。すると刺竹の先の上に足で立っていることに気が付いた。ぼくはズボンのポケットの奥にあるヒョウタン袋をさぐった。ぼくたちは待っている——奥子（アオズ）がニンニクの皮を剥いたら、すぐさま天空とビルの谷間へ舞い上がり、一緒にどうでもよい遠い彼方へ水平飛行するのを。

一九九三年

「拾骨」訳者解説

台湾の小説家・舞鶴（ぶかく／WU he、本名陳国城、1951- ）は、台湾と台湾の異界を自在に漂う旅人である。出身地は資料によって、台南市であったり、嘉儀市（台中市と台南市の間にある、台湾南部の地方都市）であったりするが、概ね台南の作家とみなされている。執筆初期の頃は度々ペンネームを変更していた。1970 年代から創作を始め、処女作は 1974 年に『成大青年』（28 期）に発表の、儚い恋を描いた「牡丹秋」である。台湾の南北を彷徨う生活をして（具体的な経歴は不詳）、1981 年から台北市の淡水にひきこもって（舞鶴自身の言葉によれば「自閉 zibi」）筆を折り、10 年を過ごした。1990 年代から再び作品を発表し始めた。2020 年の現在、69 歳になる。代表作に、『餘生』（1999）、『悲傷』（2000）、『乱迷』（2008）などがある。

短編小説集『悲傷』の序[55]を著した王徳威によると、舞鶴は「原郷人の中の異郷人」[56]である。

> 彼は原郷人である、彼が常に考えていることはこの土地の様々なことだ。そしてまた異郷人でもある、最も慣れ親しんでいる環境にしばしば異化や変化の大きな落とし穴が存在することをよく知っている。（中略）舞鶴は独自の意見を持って世に立ち独行し、荒唐無稽を好みかつ強情だが、われわれにとって頭の痛い人物ではない。だが、彼は明らかに意図的に自分の生活スタイルと文学創作でもって、われわれの堅い信念や惰性を嘲笑い、批判する——そして我々に彼とともに「拾骨」をしろと迫るのだ。[57]

舞鶴の特徴とは王徳威の言うように、まず土着性、地元指向であろう。「拾骨」（1993）の母胎回帰願望に重ねられた郷土回帰表象ついての論考を著した小笠原淳[58]も、舞鶴の「台湾郷土への独自の着眼」が舞鶴が評価されている点だとしている。「拾骨」は、ひきこもりの中年男が亡母の遺骨を墓から取り出して再度埋葬する風水の改葬儀礼「拾骨」の計画を立て、やり終えるまでの物語である。台湾の改葬儀礼のプロセスが事細かに描写されており、台南の様々な地名や寺も登場する。読みながら、主人公である「ぼく」とその亡母の幽霊とともに、台南の街をあちらへまたこちらへと巡ることができる。

舞鶴はまた、台湾の異界も旅する。「拾骨」では、「ぼく」は、スピリチュアル系導師で

---

55 王徳威《序：原郷人裏的異郷人——重讀舞鶴的《悲傷》》（舞鶴《舞鶴作品集 1　悲傷》麥田出版，2001）5 頁

56 本稿の「原郷人」、「異郷人」は中国語をそのまま用いた。「原郷人 yuanxiangren」は定着した訳語がなく、そのまま用いられることが多いようである。「異郷人 yixiangren」は「異邦人」が適訳と思われるが、「原郷人」と対になっていることに鑑み本稿では「異郷人」を用いた。

57 訳と「（中略）」は引用者。

58 小笠原淳「死者と母の郷土表象：舞鶴「拾骨」論」（『野草』90 号、2012）

ある「精神の旅行家」の本に書いてあることを頼りにしつつ、拾骨の計画を進め、おじの家で神と対話し（そしてこの神様は自転車に乗って出かけることもある）、「療養所」で様々な精神世界の持ち主と接し、天国と地獄を行き来し、寺の亀と語らい、亡母の幽霊とともに街歩きをし、亡母の身体の代わりに見立てた娼婦の下半身に包まれて亡母と交信する。そして最後に、「ぼく」は庭先の竹の上に立ち、天空とビルの谷間へと水平飛行してゆこうとする。台南の原郷と習俗を巡りながら、様々な異様な非日常とも接し、独特の精神世界が描かれる。「異郷人」の舞鶴であろう。

さらに、台湾とその異界をふわふわと漂うこの旅人は、旅しながら宇宙語を話す。もちろんこれは比喩であるが、本省人として台湾語も用いる舞鶴は、文章も非常に独特であるだけでなく極めて難解である。それは台湾の一般読者だけでなく文学評論界にとっても「困難」、「障害」であり、舞鶴の文体は「小児麻痺」であるとさえ評する論考もある[59]。

実際のところ、訳者も訳が難しいというレベルにとどまらず、皆目見当もつかない独特の語彙の頻出に何度も頭を抱えた。台湾出身者を含め、何人もの中国語ネイティブを頼って教示を請うたが、すんなりと回答が得られたケースはほとんどなかった。たいていはしばらく考えてから手持ちの端末で検索し、時間をかけてどうにか推量する、という手順であった。この小説がいつの時代に書かれたものか、著者は何者かと問われることもあった。その難解な文体をどう読みやすくかつ原作者の個性を生かした日本語とするかが、翻訳の課題であった。

とはいえ、苦心しても訳が至らない箇所は多かった。尾籠な話で恐縮だが、一つ例を挙げると、「18」、「19」節に出てくる豚の「睾丸」と母の「恥部」は言葉の音感を訳に表しきれなかった。原文はどちらも「卵孵 luanfu」である。日本語でも同じ訳語を使えればよいが、一方は豚の料理、もう一方は母の身体の抽象的な想像であるから、難しい。何らかの似た発音の訳語を探し出せていたら、主人公が豚の睾丸の炒め物を食べながら、母の恥部の想像に至った流れをより明確にできたかもしれないが、力及ばなかった。しかし、そもそも原文の「卵孵 luanfu」という語自体独特で、何人かの中国語ネイティブ（台湾出身者含む）に聞いた限りでは、検討のつかない意味不明な語であるようだ。他に、古い詩と関連づいていると思われる語や、オノマトペや抽象の入り混じった造語のようなものも散見された。

「拾骨」は、こうした難解な言葉と、極めて幻想的で超自然的な雰囲気と筆致に満ちた短編小説である。主人公が内省しながら超自然的な世界と交流し、大胆な性表現によって自己を解放してゆく様を描く作風は、どこか村上春樹を思い起こさせる。料理や飲食の仔細な描写や、「聖地巡礼」ができそうな、実際の地図を辿るかのような街歩きの描写もまた然りである。とはいえ、舞鶴の文体と語彙は到底翻訳には向いていないと言ってよいほど癖が強く、その点では村上春樹と真逆である。

---

[59] 楊凱麟《舞鶴，硬蕊書寫者》（《書寫與影像：法國思想，在地實踐》聯經出版，2015）17頁

本能的な性表現や、子宮・原郷回帰願望の表象への一望を経ると、「拾骨」の読みはさらに広がる。「拾骨」の主人公は台湾の伝統的な改葬儀礼と亡母と向き合うとともに、亡母の憂いから解き放たれることも目指している。王徳威の引用する舞鶴自身の言葉によると、「〈拾骨〉は母を亡くして 19 年後に立てた記念碑」[60]であるという。縁起のよい方位や配置を占って運気を良くしようとする風水の思想に後押しされながら、舞鶴と「ぼく」は母の死後の安寧を願う。読者は、王徳威の言うように、ひきこもりだった「ぼく」にいつしか巻き込まれながら、ともに亡母の拾骨の段取りと費用を思案し、墓を開け、頭蓋骨を手に取るまでに至る。その間、幻想的な異界と台南の街歩きに導かれ、「ぼく」が外界へ再出発するまでの伴走者となる。

親族一同墓から拾い出した遺骨を改めて納骨堂に収め、「母さん、――それじゃあ」と、最後に「ぼく」が合掌して亡母に語りかけ、骨壺の亡母の顔写真が目配せでそれに応える場面は、改葬の全工程が達成され、晴れ晴れとしている。「ぼく」はもはや飛び立つ準備ができている。作品には伝統的な習俗と他界した肉親へのリスペクト、ひいては娼婦の生々しい乳房と下半身を懐かしき母胎に見立てるほどに、亡母への過度な思慕が描かれている。それと同時に、舞鶴独特の力みのない不条理とユーモアの世界観によって味わいを増す、「ぼく」の再出発の物語も、読者に強く迫るものであろう。

「拾骨」の翻訳に際して、多くの方々の助力と指導を賜った。著者の舞鶴氏は面識のない訳者に翻訳権付与と雑誌掲載を快く許諾して下さった。心より深謝の意を表したい。また、台北・麦田出版編集者の林秀梅氏も、訳者が国外から唐突に翻訳権について問い合わせをしたにも関わらず、温かく力添え下さった。心より厚く御礼申し上げる。ここに名前を挙げることができないが、中国語ネイティブの先生方および友人諸氏に、中国語の解釈に関して親身に教示いただいた。『KOTONOHA』の吉池孝一先生、中村雅之先生は掲載の機会および拙訳への貴重な指摘を授けて下さった。そして、訳者が舞鶴作品に出会い、翻訳の機会を得たのは、愛知県立大学の工藤貴正先生が指導して下さったからだった。先生方、友人諸氏に改めて深く感謝を申し上げたい。

「拾骨」の翻訳[61]の試みは、十全でないところがあろうと思う。現時点での力を尽くしたが、読者の方の批判と教示を賜りたい。

2020 年 7 月　榊原真理子

---

[60] 王徳威《序：原郷人裏的異郷人――重讀舞鶴的《悲傷》》（舞鶴《舞鶴作品集 1　悲傷》麥田出版，2001）第 8 頁

[61] 底本は、舞鶴《拾骨》（舞鶴《舞鶴作品集 1　悲傷》麥田出版，2001）。